

記念物
【史跡】

ふーしなーかまあと
黒石川窯跡

指定年月日／2012（平成 24）年 8 月 3 日
所在地／大川 1500-1



発掘調査時の窯跡（現在は保存のため埋め戻している）

黒石川窯跡は、1981（昭和 56）年、県営宮良川土地改良事業所による圃場整備の際に発見され、市教育委員会により 1988（昭和 63）年から 1991（平成 3）年まで 3 次にわたり発掘調査が行われた。

発掘調査では、ほぼ同じ場所で改築を重ねたと考えられる 6 基の窯跡のほか、石積みの囲いや物原（未成品や失敗品の捨て場）、粘土を採掘した跡と考えられる穴などが見つかった。また、物原を中心に瓦類をはじめ、壺・甕・鉢・徳利・急須などの陶器類、窯道具などが出土している。

八重山と琉球王府との往復文書である『参遣状』には、1730 年に黒石川というところに窯を移したことが記されている。八重山の窯業は、1695 年の名蔵瓦窯の開窯から始まり、1724 年には沖縄本島から陶工・仲村渠致元が来島し、山田平等に窯を築くが、焼物製作で大量に使用する水や薪などの利便性から、黒石川に窯を移したとされる。

黒石川窯跡は文献記録に残る近世八重山の陶器生産を担った窯跡としてだけではなく、琉球窯業史を考えるうえでも貴重な窯跡である。

市指定

記念物
【天然記念物】

ふきどうがわ ぐんらく
吹通川のヒルギ群落

指定年月日／1973（昭和 48）年 1 月 13 日
所在地／野底 106-479（吹通川流域）



吹通川は野底岳（282.4m）を源流とする全長 2.2 km の河川で、海水と淡水が混じり合う汽水域に広大なマングローブが広がっている。マングローブとは、熱帯や亜熱帯地域の河口の湿地帯や沿岸部の干潟など、潮の干満の影響がある潮間帯に分布している植物の総称で、吹通川のマングローブは、オヒルギ、ヤエヤマヒルギなどのヒルギ植物が群落を形成している。

川の流れによって形成された砂州や周辺の断崖地帯には、亜熱帯性植物が数多く生育している。マングローブには野鳥やチョウ類の生育や飛来も

多く、また繁殖の場所でもある。吹通川にはエビ・カニ類、魚類が潮の干満によって海から川へ、川から海へ遊泳する。吹通川付近の崖下には、貝塚や古墳もあり、単にヒルギの群落だけでなく、動植物や岩石、考古学等の面にわたって多くの資料を内包する場所である。